



# 鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第66号

2013年11月1日

## 「狐塚」はいま…

### 奇跡の木立が存続の危機に

2年前の3月11日、黒々とした津波に整然と整えられた耕作地が呑み込まれていく映像に、誰しも息を呑んだであろう。あらゆるものが呑み込まれたと思われた仙台平野で塚の木立が一つ生き残っているという情報を得たのは、まだ日本中が被害の大きさに呆然としているころだった。奇跡的に生き残ったのは旧家の屋敷神として長く守られてきた「狐塚」(仙台市若林区荒浜)。ぽつりと生い茂る数本の松と、その足元の小さな祠は、一面のがれきりとなった平野で異彩を放ち、大きな痛手を受けた被災者の心にも感動を引き起こした。

何とかこれを守りたいと、社叢学会ではこの塚の故事来歴を調べると同時に、海水をかぶってかなりのダメージを受けているであろうマツの経過観察を継続することとした。

さてこの「狐塚」は、日本三稲荷のひとつともいわれる竹駒神社から鹽竈神社に向かうおキツネさまの休憩地といわれ、この地の所有者が大切に祀りしてきた。昭和58年ごろ開通した県道新ルートも、狐塚を避けるために大きなカーブを描いている。この塚を巡っては、狐と人間にまつわる様々な伝承や“祟り”譚が残されているが、大津波に耐えて生き残った塚は、何か超自然的な力が働いたと思わせる光景であった。

ところが、ここを守ってこられた家のご当主、

後継者が共に津波の犠牲になられ、

家屋の復興もままならない中で、やむなく放置されるという状況に置かれることになってしまった。

社叢学会では、まず樹木保護の観点から土壌状況を知るために、11年8月に化学分析を実施。樹木には不適切な高濃度のナトリウムが認められたため、12年3月に鉄鋼スラグ由来の土壌改良剤を投入、同年7月の土壌分析ではかなりの改良効果が出ていることがわかった。ところがその後、地盤沈下の影響からか、周囲が水びたしになる状況が続き、13年3月の再度の化学分析では改良効果はほとんどなくなっていることが判明した。10本ほどあったマツも逐次枯死しており、2013年9月時点ではわずかに1本が辛うじて生き残っており、これも先端部分に茶化が認められ、どこまで持ちこたえられるかが懸念される。

周辺では県道の大規模な嵩上工事が計画されており、狐塚は道路の法面にあたり原形はとどめられないといわれる。大津波に耐えた塚の木立の記憶と記録をどのように引き継いでいくのか、社叢学会の役割が問われている。



荒れ果てた仙台平野にぽつりと残る「狐塚」  
(2011年4月撮影)

## 次回予告【第58回関西定例研究会】

- ◆日 時：2013年11月30日(土) 10:00集合
- ◆集合場所：叡山電車「鞍馬駅」出口前
- ◆行 程：鞍馬駅→鞍馬寺→奥の院→モミ・ツガ天然林→貴船神社解散
- ◆講 師：曾根祥子(鞍馬寺霊宝館学芸員)
- ◆説 明：渡辺弘之(社叢学会理事・京都大学名誉教授)



## 神戸市の神社における農村舞台の変容状況

講 師：上甫木昭春(社叢学会理事・大阪府立大学教授)  
平野裕二郎(神戸市建設局公園砂防部緑地課)

コメンテータ：糸谷 正俊(社叢学会理事・株総合計画機構相談役)

**神社における農村舞台に着目する背景：**近世(江戸時代)には社寺や広小路が遊空間として、露天や屋台店、辻講釈や芝居小屋など、多彩な娯楽の場となっていた。近代(明治以降)になって、行政による公園設置が進められたが、8割方が以前から娯楽の場として人々が集まってきていた場所の追認で、日吉山王神社(麴町公園)、神田明神社(神田公園)、寛永寺(上野公園)、浅草寺(浅草公園)など、多くの神社仏閣が都市公園となり、その精神性も保持されていた。

**防災施設としての公園緑地の再認識：**関東大震災時に、浅草公園や上野公園、後樂園など公園や緑地が火災を免れたことから、防災機能に注目されることとなった。現在、公園の機能としては①防災機能 ②環境保全機能 ③景観形成機 ④レクリエーション機能 等があげられる。

終戦後の政教分離政策(1947)によって社寺境内地公園が消滅したが、都市公園法の制定(1956)によって、原則廃止禁止、建蔽率の制限、施設内容の制限、配置基準の設定等、オープンスペースの恒久的確保が実現した。しかし精神性、娯楽性、文化性が消失し、人を繋ぐ拠り所ではなくなった。こうした中、神社の農村舞台は精神性と娯楽の双方を満たすものではないかと思ひ、この調査に取り組むことにした。

**神戸市の神社の農村舞台の存廃状況：**農村舞台とは、江戸時代に成立し始めた、神社に付随して芸能を行う常設の建造物で、地域コミュニティの中心として機能していたが、その数は減少傾向にある。この存廃と分布状況、農村舞台史・芸能史の変容状況、コミュニティ形成への影響を把握することで、今後の農村舞台のあり方を探ることとした。

神社明細帳に記載の310社(神戸市内)から農村舞台の痕跡として「長床・長殿・長納屋・舞台・神饞所」という名称のある50社を抽出、08年6月に実地調査を実施し、①農村舞台の存廃状況 ②農村舞台の舞台種類 ③神社境内の空間構成を調べた。

**存廃状況と分布地域：**農村舞台が現存している神社は計20社で、そのうち3社は舞台が改築されていた。社務所や公会堂・空地などに変容し、農村舞台が廃絶している神社は23社、舞台痕跡が把握できない神社は7社だった。これらは神戸市の北区・西区のみ存在し、分布地域は淡河・岡場地区(26社中5社現存：早い段階で芸能が伝播。芸能を神事として奉納する形で楽しんでいた。長床を転用した舞台が多い)、山田・押部谷地区(15社中10社現存：天領で芸能に関する規制が少なかった。特殊機構をもつ舞台に進化したものが複数存在)、明石川流域地区(9社中5社現存：旧明石藩領で能舞台が多い。比較的遅く芸能が伝播した地区で、幕藩体制の終焉を機に能舞台を参

考に建造したと思われる)の3地域に分けられ、それぞれ歴史的な背景や芸能の伝播時期によって、舞台種類や農村舞台形態に地域性がみられた。

農村舞台痕跡が確認できた43神社の宮司を対象としたアンケートや既往文献から、農村舞台は江戸中期～明治期頃に成立し、盛んに芸能が行われたが、1890年代に地芝居(地域住民が演じる芝居)の衰退と同時に一部が廃絶し、その後1945年～1965年で全てが廃絶したことがわかった。廃絶要因としては、高度経済成長に伴う娯楽の増加、ライフスタイルの変化、市街化の進展に伴う若い世代の都市への流出が考えられる。

一方、平成に入って芸能が復活した神社が山田・押部谷地区に5社あり、これらを比較検討したところ、それぞれ主体的な維持管理を担うのは氏子や自治会で、文化財指定を受けた所では保存会を発足させて、いずれも利用可能な状態で維持管理されていた。利用面で特筆されるのは下谷上天津彦根神社で、ここでは農村歌舞伎の存続をめざす個人が地域の子供たちの指導を続けてきた。さらに行政が地域による青少年の居場所作り事業の一環として歌舞伎教室を開催、この卒業生が地域組織を結成、これらの団体が農村歌舞伎を上演し、舞台を利用してきた。

その後、下谷上天津彦根神社の演者が藍那天津彦根神社での上演を提案し、これを契機に農村舞台が復活した。このように外部からの提案も復活の契機となるが、これらを積極的に受け入れるためには「里づくり協議会」等、地域活性化検討組織の受け皿が必要であろう。一神社圏域で舞台の維持管理、歌舞伎の人材育成や公演など農村舞台の運営の全てを担うことは困難で、地域行政のバックアップは地域の負担を軽減すると同時に、運用ノウハウを伝える役目も果たすと考えられる。芸能文化を残していくためには、地域や神社同士の密接な関係が重要であろう。

**コミュニティ意識に寄与：**アンケートでは、運命共同体として地域のつながりへの寄与などについて5段階評価で聞いたところ、過去において神社は強くコミュニティ形成に寄与していたこと、現代においては農村舞台が現存する方が、神社が交流の場に寄与する度合いが高いことがわかった。舞台があることで何らかの活動が起り、地域の拠点となったり、利用が無くても地域の歴史ある建造物として認知されていると考えられる。芸能が復活した神社に加えてカラオケ大会、餅撒きの場として利用している神社もあり、こうした多彩な利用は農村舞台の存続に有効であると同時に、地域の新たな娯楽の場として注目を集めており、コミュニティ形成への寄与が期待できる。今後は舞台存続や芸能復活についての連携体制を構築し、文化財や神社が持つ精神性への理解を深める必要がある。



## 伊勢と出雲

### —社叢文化から遷宮の意味を考える

講師： 藺田 稔(社叢学会副理事長・京都大学名誉教授)

共催： 國學院大學環境教育プロジェクト  
(公財)ポークラ伝統文化振興財団

**社叢学会と式年遷宮**：神宮の式年遷宮と社叢学会の関わりは深い。平成14年に設立したばかりの社叢学会は、初めて地球環境をテーマに平成17年に開催された愛知万博において、5つの映像作品を製作、「杜の文化」をテーマに千年の森、天空鎮守の杜などを出展した。そしてちょうどその年に今回の第62回式年遷宮の最初の行事「御杣始祭」(御用材の伐り出しのための神事)も行われた。社叢学会の働きかけによって、社叢学会主催の万博メイン会場におけるイベントの際に、その神事がNHKにより万博会場で生中継され、その後全国放映された。

そして今回のご遷宮に関わる行事は次々に映像化、テレビ放送(NHK)され、より多くの人々の関心を集め、今年はずでに例年の年間参拝者数約700万人を300万人も上回り、最終的には1200万人を超えるだろうと予想されている。また何よりも感じることは、若い参拝者が増えたという事だ。かつては西洋文化を褒め称え、日本文化を卑下する時代もあったが、価値あるもの・良いものは良いと素直に感じる人が増えてきたのだろう。

**伊勢と出雲一両遷宮に参列して**：伊勢の御遷宮に先立ち本年5月10日午後7時から出雲大社で「出雲大社本殿遷座祭」が行われた。出雲は60年ぶりの大遷宮であった。その日出雲の天候は大荒れであったが、不思議なもので祭の時刻になると雨は止み、そしてまた祭が終わると降り出した。一方、神宮では今月2日午後8時から内宮、5日午後8時から外宮で「遷御の儀」が行われた。10月だというのに汗ばむほどの陽気であった。

両遷宮に参列して共通して感じたことは、実は参列しているのか、していないのか、わからないというものだった。日が沈む前に参進し、ひたすら待座して始まるのを待つ。暗闇の中で行われる神事は、ほとんど何も見えず、何も聞こえない。古来、日没から夜明けまではカミ(神、霊)の時間であり、ヒトの時間は昼とされ、祭は夜に行われてきた。あえて火は消し、暗がりの中で虫や風の音と共に、遷宮を気配で感じる。これも一つの日本の文化であるが、

現代では夜も明るくなり、このような体験をする機会が少なくなってしまった。相違点としては、出雲が仮殿遷宮(仮殿・権殿から本殿へ)であるのに対し、伊勢は本殿遷宮(旧殿から本殿へ)だということである。

**式年遷宮の意義**：仮殿遷宮は、一時的に仮の御殿に神にお移りいただき、改修後再び元の位置にお戻りいただく臨時的に行われるお祭で、かつては伊勢も仮殿遷宮であった。では何故、式年遷宮となったのだろうか。『造伊勢二所太神宮寶基本記』には、天武・持統朝に国家祭祀の整備が確立された様子が記されている。踐祚大嘗祭(天皇即位後の最初の新嘗祭)は名実ともに天皇となる神事であり、その祭祀では原型を再現する新殿(大嘗宮と新正殿)が建てられ、由貴大御饗が行われる。最も神聖な食物を神に供え、共食することで神と人が一体になる。この祭のかたちは伊勢の式年遷宮として継承されている。

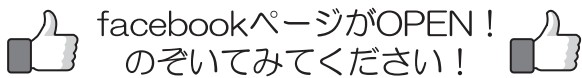
古来日本の文化において、神話的な時間の捉え方は、再び戻ってくる、次の世代に継承するといった「サイクル」であり、過ぎ去った時は二度と戻ってこないという歴史的(直線的)な時間の捉え方とは違う。同じものが同じ形でよみがえる。お正月がおめでたいという感覚は、「新しい」からではなく、「新(あらた)まる」からである。これは自然にそった生命観の表れであり、稲作とともに季節は繰り返す。時が流れれば古い、朽ちて行くものだが、神話から連綿と伝えられた文化として、生と死と再生という霊的生命観であり、「いのち」の連続である。この生命観が式年遷宮に受け継がれている。

神道は教団の宗教というのではなく、日本の一つの文化であり、人と自然を区別しない、自然と共生する神話的世界観の表象であろう。自然から生まれ、自然に還ることで安らぎを感じるころや発想がある。森に囲まれて神秘を感じる宗教は今ほとんど残っていない。自然や森にスピリチュアルなものを感じる文化、これが神道の特徴である。

何故20年に一度なのか、決定的なことはいえないが、建物の老朽化(再生)、技術の継承などにおいて20年は絶妙なサイクルである。(文責・渡邊節子)

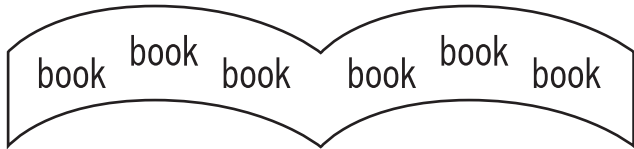
## 次回予告【第58回関東定例研究会】

- ◆日 時：12月14日(土) 14:00~16:30
- ◆場 所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念1号館4階1405教室
- ◆テマ：東日本大震災の被災地と地域の植生
- ◆講師：濱野 周 泰(東京農業大学教授・社叢学会理事)



facebookページがOPEN!  
のぞいてみてください!

社叢学会のfacebookページがオープンしました。定例研究会の案内など様々な情報や、会員の皆さまが取り組んでいらっしゃる活動もお伝えしていきたいと考えています。ページを開いてみてください。URL : <https://www.facebook.com/shasou>



京都環境学「宗教性とエコロジー」  
早稲田環境塾(代表：原剛) 編

信楽香仁・鞍馬寺貫主、梶田真章・法然院貫主、高井和大・貴船神社大宮司など京都を代表する聖職者たちが環境保全・自然保護という現代の課題をどう考え、問題解決に向けて何を発信しているのかを語った記録。第I部：エコロジーと宗教性、第II部：水俣から京都へ、補：京都から何を学ぶか、から成り立っている。

京都に住む私自身も、直接このような命題についてこれらの方の考えを聞いたことがないのだが、社叢の研究・保全には社寺との十分な連携が必要である以上、聖職者たちが環境・自然をどのように考えているのかを知ることが必要で、本書ではその一端を知ることができた。

仏教が自然を理解していた一つの証しが、「因陀羅網(羅網)」であろう。もとは帝釈天の宮殿にかかっている宝の網のことらしいが、現在では仏像を安置する空間の前に掛けられている宝珠を重ねた飾り網のことである。一つの珠に触れば、波動を四方に伝え、全体が揺れる。これは「すべてのものがお互いに関わり合い響きあっている世界」を表わしているとされる。

これはまさに、私たちのいう食物連鎖、作用・反作用、あるいは生態系そのものを表していると考えてよい。一読をお奨めする。(渡辺弘之)  
藤原書店、本体価格2,000円

## 事務局から

●今年度の会費未納の方には振替用紙を同封いたしました。何かと多端な折とは存じますが、社叢学会は会費で運営しております。ご理解とご協力をお願い申し上げます。なお、12月末日までに入金の確認ができない場合は、「鎮守の森だより」等をお送りできなくなりますので、悪しからずご了承下さい。退会をご希望の場合は、お手数ですが会員番号とお名前をご記載の上、Fax・Mailでその旨、お知らせ下さい。

銀行振込もご利用いただけます。三菱東京UFJ銀行 京都支店 普通口座6720345 特定非常利活動法人社叢学会 理事長 上田正昭です。

●次回の関西定例研究会は晩秋の鞍馬山を訪れます。鞍馬寺についての講演、霊宝館見学などの後、モミ・ツガ天然林などの自然観察をしながら貴船神社までのハイキングです。紅葉も終盤です。ふるってご参加ください。

## 編集後記

facebook始めましたって、ジツは、、もう2年も前から始まってたんです。。。D.キーン名誉顧問と上田理事長との対談などの社叢復興シンポジウムを開催した時、広報のために会員のHさんに聞いて頂き、爾来2年、ずっと寝たふり。。。と、S理事から定例研究会のPRをご関係諸方にしてくださるといふありがたいお申し出が。起こさなきゃ！と、おたおたしている間にもう新情報が続々と！忙しい人ほど仕事が早い！を実感したのでした。多謝、多謝。他の理事におかれても見習っていただきたいものである！特にM理事！あなたですよ！（藤岡 郁）

渡辺理事が講演  
「京都の社叢と社寺の樹木」  
12月9日に府立植物園で  
問合せ：京都園芸倶楽部 tel075-701-0595

## ただ今募集中！！

『社叢学研究』第12号 鎮守の森の活動報告 投稿締切：2014年1月10日必着  
来年度年次総会 研究発表者 応募締切：2014年3月末日必着 詳細は次号

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号  
TEL075-212-2973 FAX075-212-2916

URL <http://www.shasou.org> E-Mail [shasou@ams.odn.ne.jp](mailto:shasou@ams.odn.ne.jp)

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内

TEL080-1514-5032 E-Mail [shasougakkai@hotmail.com](mailto:shasougakkai@hotmail.com)

(当面、このアドレスでお願いいたします)